

女性一般の文化的優遇につながったのではないだろうか。「913年の歌合せでは、内親王が左右の男女混成チームのリーダーを務め、主催者は中宮で、講釈をしたのも女性。みな顔を見せ、声を聞かせている。11世紀になると講師は男性にかわり、女性は御簾の後ろに隠される。高貴な女性は顔を見せたり、声を聞かれるのははしなたいという認識が始まっていた」という。女性は表舞台から消えたが、女性詩人は消滅せず、『新古今集』その他の勅撰集を通じて足跡を残した。これは平安貴公子が「美しく書く女性」を評価したことと無縁ではなさそうだ。『源氏物語』の英訳者アーサー・ウェイリーは「平安朝の真の宗教は書道であった」と述べている。漢字という表意文字（線による絵）が書道という美術に発展しただけでなく、漢字の祖である「甲骨文字」が呪術性をもっていたことを考えれば、書字への信仰があっても不思議ではない。女性は流麗なひらがなで和歌を詠じ、物語世界で羽ばたき、日記で内省することができた。宮廷女房という読者かつライバルの存在もまた、書き手を刺激したことであろう。

歌合せはアイステツズヴォッドに似た詩歌のコンテストだが、音声の祭典ではなく、書画、調度品、金細工、漆芸、抄紙、きらびやかな衣装・・・目もあやな王朝絵巻だった。「聞く文化」と「見る文化」は、ウェールズと日本それぞれの社会、言語、国民の好みと審美観から生まれ、それが宮廷女性のありように影響したに違いない。『マビノギオン』のヒロイン達は話しぶりで、『源氏物語』のヒロイン達は書きぶりで、知性や感受性や人品を発揮しているのは、そうした文化伝統に根ざしたものである。

## Forum-On : カムリの文学を楽しむ :

中期ウェールズ語伝承に描かれた

英雄像とその世界

コーディネータ : 森野 聡子

Fforwm-Ymlaen: Delweddau o'r Arwyr ac '*Ein Byd*'

yng Ngyfarwyddyd Cymraeg Canol

Cadeirydd: Dr. Satoko Ito-Morino

要旨 Crynodeb: Chwedlau a cherddi Cymraeg Canol ar gael heddiw yw cymysg o destunau ysgrifenedig sydd wedi tyfu o'r traddodiad brodorol a llafar. 'Dysgedig' (Nesta Lloyd a Morfydd Owen, 1986: xix) oedd natur y rhain gan nad swydd y beirdd yn adlonni'r gynulleidfa yn unig. Adroddod y beirdd *Dri Chof Ynys Prydain*, sef *Hanes* y Brython, eu *Hiaith*, ac *Achau'r arwyr* a ymladdodd erbyn gormesoedd o dramor (Saeson yn arbennig). Dyma hen gof a roddai i'r Cymry yn ystod yr Oesoedd Canol (tuag 800-1200) wybodaeth er

mwyn deall y byd o'u hamgylch. Ninnau yw ystyr y Cymry yn wreiddiol a cheir y disgrifiad o Gymry yn y deuddegfed testun a elwir *Enwau Ynys Prydain* fel y canlyn: nyt oes dylet y neb ar [yr] Ynys Honn, namyn a genedyl Gymry ehun, Gweddillyon y Brutannyeit, y ddeuth gynt o Gaer Droea. Awgryma'r frawddeg hon mai cofion cymdeithasol am Sefydlu a Choll Prydain oedd 'cyfarwyddyd' a gadarnhasai cysyniad y Cymry fel 'Ein cenedl' dros y cyfnod hwn.

Ynys Prydain cyfarwyddyd Cymry

## 1. Forum-On のテーマ

今回、初めて文学を扱うフォーラムを企画するにあたり、「中世ウェールズ文学」や「マビノーギオン」と一般に言われている作品群の性格を、説話を取り扱う世界の範囲と、そこに描かれる英雄像という二点から検証することとした。

まず「中世ウェールズ文学」について、ここでは、「古代ブリテン人の口頭伝承が、異民族の侵攻によってブリテン島が北と南に分断された西暦6世紀以降ウェールズで保存され、800年頃からラテン語や中期ウェールズ語で書き記されたもの」と定義する。現存する最古のウェールズ語の著述は土地裁判記録や証文であるため、『ブリテン人の歴史』(*Historia Brittonum* 828/9) など、ウェールズ在住の聖職者によるラテン語文献にウェールズの文学的伝統の端緒は求められる。逆に *Sieffre o Fynwy* の『ブリテン列王伝』(*Hisotria Regum Britanniae* c.1136) は、ブリテン伝承を素材にしているものの、ノルマン・フレンチの政治的イデオロギーのもとに編集されているため除外される。よって年代区分は、『列王伝』のウェールズ語訳が流布する1200年までとする。

## 2. 中期ウェールズ語伝承の性格

上記の時代に書かれた文学を呼ぶ名称は数々あるが、ここでは、あえて「伝承」、ウェールズ語の *cyfarwyddyd* という用語を使用する。GPCによれば「知、ガイダンス」という意味を持つこの言葉は、*bardd* や *cyfarwydd* と呼ばれる職業的詩人・語り部が、何のために伝承を語り続けたのかを明らかにしてくれる。

*Cyfarwyddyd* とは、共同体意識を支える価値観・行動の〈手引き〉となる〈知の大系〉であり、具体的には、*Tri Chof Ynys Prydain* と呼ばれる三つの〈記憶〉 *Hanes, Iaith, Achau* を総括する。これらは、自民族のルーツと歴史、すなわち、「我々」はどこから来て、なぜここに居住するのか、なぜ現在の物事がこうあるのかを説明すると同時に、「我々」の祖先の英雄的行為を語り継ぐことで現在の行動規範として示すという意義を持っていたと考えられる。別の言い方をすれば、このような伝承を同じ言語で語り合い、そのことを通じて、同じ集合的記憶を伝える共同体が「我々」と定義できるだろう。